

茅ヶ崎同盟教会たより 2021年11月

彼は死にましたが、その信仰によって、今もなお語っています。 新約聖書 ヘブル書11章4節

●この秋に、ヘンリ・ナウエンの『死を友として生きる』という著書が翻訳出版されました（日本キリスト教団出版局）。50代半ばに、交通事故で瀕死の重傷を負ったことをきっかけに「死と親しむ」ということについて思索を深めたカトリックの司祭のことばです。

●彼はこう問いかけます。「私たちの死は友人たちにとって、新しい命、新しい希望、新しい信仰をもたらすものとなるのでしょうか。あるいは、悲しみのもとにしかならないのでしょうか。最も重要な問題は、残された数年間に何ができるのかということではありません。そうではなく、死ぬことによって、愛する人々や愛してくれている人々に神の霊を送る新しい役目を担うために、私たちはどのような死の準備をすればよいのかということです。」

●死とは「自分の命を完全に引き渡す大きな闘い」でありながら、自分だけで完結してしまうものではないことに気づかされます。人との繋がりの中に生かされている私たちです。死はその関わりから切り離される出来事ではなく、むしろ家族や友人たちに新しい関わりを生み出すものとなり得るのです。

●教会では11月第1の日曜日を召天者記念礼拝としてささげています。すでに天に帰られた仲間たちを偲ぶとき「その信仰によって、今もなお語っています」という御言葉を実感させられます。天と地を繋ぐ関わりの中で、地上にある私たちは新たな連帯を経験しながら、いのちを喜び感謝する者とされていくのです。

祝福がありますように。牧師 山村 諭